



MAIBUN 小竹貝塚プロジェクト Vol.1

富山県埋蔵文化財センター

富山市小竹貝塚は第一級の考古資料が眠る宝庫です。小竹貝塚について様々な視点から学ぶ・考える・楽しむ「埋文/小竹プロジェクト」がスタートします。

第一弾は平成31年1月20日に行われた県民考古学講座「縄文時代前期の北陸地方におけるニホンジカの利用」—小竹貝塚と鳥浜貝塚の比較を通じて—（講師：慶應義塾大学大学院修士課程1年 佐藤巧庸氏）について特集します。



佐藤氏は動物考古学が専門であり、講演では動物考古学の視点から見た小竹貝塚、さらに福井県の鳥浜貝塚との比較から、縄文時代の狩猟における主要な獲物のひとつであるニホンジカの利用について研究発表がなされた。



最初に出土したニホンジカの骨について、以下の3点を中心に観察してみる。

1. 骨について傷

シカを解体する際、おもに関節付近において腱などを切断した傷痕が骨の表面に残る例が見られる。カットマークと称されるこの痕跡は、石器の刃部によるものとみられ、縄文人が実際に獲物を解体していたことの証左と考えられる。

2. 不思議な割れ口

骨の割れ方を観察すると、スパイラル断端・剥片と呼ばれる斜めに裂けたような割れ口が多数見受けられる。実験の結果などによると、こうした割れ口は新鮮な骨を割った場合に現れる特徴的な形状だと確認されており、縄文人は肉だけでなく骨髄などの採取も想定して動物資源をくまなく利用していたことがわかる。



3. 職人の技

シカの骨・角は釣針、刺突具などの狩猟用品から、垂飾、髪針などの装飾品まで幅広く用いられる素材である。なお、骨角器未成品の出土などから小竹貝塚は製作遺跡という一面をもつと考えられている。

また、佐藤氏はニホンジカの利用という観点から、北陸地方の縄文人の生業の一端を明らかにすることを目的



縄文人とニホンジカ―捕獲～廃棄―



とし、小竹貝塚（以下、小竹）と同時期の福井県鳥浜貝塚（以下、鳥浜）の出土資料を詳細に観察し、比較分析を行っている。

そこでは縄文人とシカの関わりとして「捕獲→搬入→解体→利用→廃棄」の5段階を想定し、その実態を出土骨の状況から導き出している。

分析方法は①骨端癒合時期からの年齢査定、②部位別出現頻度、③イヌの咬み痕と骨密度の影響、の3点であり、これらを両遺跡で比較検討した。

その結果、①では両遺跡ともに幼・若獣を狩猟対象外とする共通性があり、鳥浜では2歳以下、小竹では3歳以下の個体はほぼ含まれないことがわかった。

しかし②・③では両遺跡で異なる結果が見られた。

②について、鳥浜では頭部を含む全身骨が出土するが、小竹では四肢骨が主体で頭部はほとんど出土しない。これは遺跡内での解体の有無を判断する根拠とも考えられ、小竹では他所での解体の後、必要なパーツのみを搬入していた可能性がある。ちなみに両遺跡とも道具の素材として加工容易な鹿角や、骨丈が長い中足骨は出土が少ないことから、資源として意図的に抽出されていた可能性が高い。

③を比較する際は、まず利用後の廃棄場所が問題となる。鳥浜では川湖に廃棄していたため外界からシャットアウトされた状態であり、骨密度の強弱に関わらず遺存状態は非常に良好である。一方、小竹の場合は貝層上などの陸地へ廃棄したことから風化や犬などによる持ち去り等、二次的な破壊を受けやすい環境にあったと考えられる。

北陸地方は貝塚の数が少なく比較できる資料は多くないが、同時期の類似した遺跡間においても動物利用には若干の差異が認められた。これが地理的環境によるものか、遺跡の性格か、今後の研究が待たれる。

研究手法

分析①：骨端癒合時期からの年齢査定

→狩猟された個体の年齢構成を検討

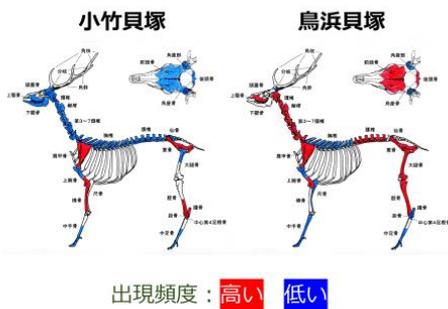
分析②：部位別出現頻度

→居住地への搬入や道具資源としての利用を検討

分析③：イヌの咬み痕と骨密度の影響

→資料の状態から利用後の廃棄について検討

分析結果②



まとめ：ニホンジカの利用

